

肝臓がんの治療

ウイルス性肝炎に対する治療の進歩などにより、肝臓がん（肝細胞がん）を発症する患者さんは年々減少していますが、「沈黙の臓器」といわれる肝臓に生じるがんは早期発見が難しく、再発も多いため、予後（医学的な見通し）の良くない病気です。今回は、その肝臓がんの治療につきお示しします。

【手術】

お腹を切って開き（開腹）、がんとがんが転移している可能性がある範囲も含めて切除することが基本とされています。病状や設備によっては開腹せず、腹腔鏡という細長い内視鏡を用いて手術が行われることもあります。がんとその周囲を大きく切り取るので治療効果が最も高く、大きながんを治療することもできます。ただし、身体的な負担は大きく、肝機能や合併症の程度により、切除できないと判断されることもあります。

【局所療法】

超音波（エコー）でがんの位置を確認しながら、開腹せずにお腹の皮膚から針を刺して、高周波（ラジオ波）を発生してがんを焼く治療法です。比較的小さながんに治療効果が高く、体への負担が小さいことがメリットです。ちなみに、昨年の当院でのラジオ波治療の件数は、関東地方の病院で28番目でした。あまり大きながんには適さない（焼ききれない）とされますが、近年は広範囲を治療できる「マイクロ波」を用いた治療も保険適応となっています。

【カテーテル治療】

X線で撮影しながら、カテーテルとよばれる細い管を足の付け根から動脈に差し込んで、がんの近くまでカテーテルを進め、抗がん剤や塞栓物質をがんの栄養血管の中に流し込む治療です。大きながんや多数のがんを一度に治療することができ、体への負担が比較的小さいことがメリットですが、がんを治す（根治）というよりは、病状を抑えることが目標となる治療法です。

【全身化学療法】

がん細胞が増殖するために利用される因子（分子）に作用して、がんを小さくするための薬を内服もしくは点滴で投与する治療法です。進行肝細胞がんの標準治療として世界的に位置づけられており、近年複数の薬剤が使用できるようになりました。副作用が出ることが多く、習熟した肝臓専門医が治療を行うことが望ましいと思います。

【肝移植】

傷んだ肝臓全体を取り出して、他の人の肝臓を移植する方法です。親族や配偶者から肝臓の一部を提供してもらう「生体肝移植」と、脳死状態の人から肝臓を移植する「脳死肝移植」があります。がんを取り除くことに加えて、慢性肝臓病という肝臓がんの背景そのものを治療できる究極の治療ですが、治療施設が限られており、ドナー確保などの問題があります。

【重粒子線治療】

重粒子線（炭素イオン）を光のおよそ70%のスピードに加速して照射し、体の深部の肝臓がんにも強いダメージを与える治療です。体への負担が少なく、比較的大きながんにも対応できるのがメリットだと思います。治療費用が高額ではありますが、当院から紹介し群馬大学重粒子線治療センターにて治療を受けてこられた患者さんも複数いらっしゃいます。

【内科診療部長 竝川 昌司】

